

デジタル人文学が拓く ヴィクトリア朝文芸雑誌研究の可能性

関 良 子

Abstract

This article outlines one of the current research tendencies in Victorian culture – the utilization of digital archives – and demonstrates the possibility and the necessity for overseas scholars to make use of such materials. A growing number of digitized archives are nowadays more readily available online and this expands the potential of overseas research on Victorian literary periodicals dealing with the sources which were actually published in the nineteenth century. Unfortunately, however, such online archives are not fully utilized and still remain a largely unknown resource for Japanese scholars. The reason may lie in the fact that methodologies of using such archives in overseas research are not fully discussed or developed. To address this shortcoming, this article outlines the rapidly changing history of digitization of the nineteenth century documents.

Findings from this research suggest that several unsolved problems remain. One is that the quality of each electronic archive is not always good enough for in-depth research. Google Books has been tying up with major university libraries since 2004 and providing us with online access to millions of nineteenth century books. However, their principle is to scan as many books as possible and as quickly as possible, and for this reason the quality of the scans is mixed. Other problems are that such mass digitized archives sometimes do not give us enough bibliographical information and that they are not organized in call numbers, chronological order, or through any other kind of cataloguing. This means, therefore, that scholars are merely provided with chances to encounter a limited collection of the primary sources and unless we happen to come across the right one, we are still extremely limited in conducting research.

In order to solve such problems, the importance of Digital Humanities is now being prominently highlighted, and many projects and educational programs are taking place in the UK and the US. University College London, for example, launched the Centre for Digital Humanities and will start a new masters program in Digital Humanities next year. The National Endowment for the Humanities in the US founded the Office of Digital Humanities in 2007 and offers start-up grants for research projects in that field. I argue that overseas researchers on Victorian culture should also participate in such discussions about the utilization of digital archives. Those scholars who manage digital archives emphasize the importance of interdisciplinary and collaborative research, open access to the resources, and long-term sustainability of digitized archives. If overseas researchers also contribute to the discussion and make use of digitized archives, the significance of such materials should also increase. We need to consider how we can use such resources effectively for distance research, and how we might collaborate with scholars who release digitized archives to the world.

はじめに

本稿は、本年度より取り組んでいる科学研究費補助研究（若手研究B）「ヴィクトリア朝詩学の確立と破綻——文芸雑誌上の論議を手がかりに」（課題番号 22720102）の研究報告の一部である。最初に当該研究全体の見取り図を説明した上で、本報告の目的を提示したい。

本研究は、19世紀中葉から20世紀初頭にイギリスの主要な文芸雑誌に発表された文芸批評、とりわけ詩学論議を精査することにより、中期ヴィクトリア朝詩学から世紀末詩学へ、さらにモダニズム詩学の誕生を機にヴィクトリア朝詩学が破綻をきたすまでの変遷を解明することを目的としている。これをさらに大胆に表現すれば、21世紀的視座からヴィクトリア朝詩学の特質を再定義することに主眼をおいている。では、「21世紀的視座」とはどういうことかということ、これには二つの目論見が存在する。一つは、現代のヴィクトリア朝詩学に対する考え方がいかに20世紀初頭の批評基準からの影響を受けたものであるかを論証すること、もう一つには、最新の研究環境を活用することである。

まず、前者について説明を加えれば、従来ヴィクトリア朝詩学は、先行するロマン派詩学、後続するモダニズム詩学と比べ、英文学史上、顕著な特徴が見られないものと等閑視され、長編小説が多く世に生み出されたヴィクトリア朝時代において、詩はむしろ不在に等しかったとさえ捉えられてきた。この「ヴィクトリア朝時代における詩の不在」という認識は、当時を代表する詩人兼批評家であるマシュー・アーノルド（Matthew Arnold, 1822–88）による「現代はなんと『非詩的』（*unpoetical*）な時代なことか」（Arnold 1968:131）という発言に代表されるように、ヴィクトリア朝時代の詩人や知識人ら自身の実感に裏付けられたものでもあるが、それと同時に、20世紀初頭のモダニズムの詩人や批評家らによる反ヴィクトリア朝的精神が捏造したものであることも否認ない¹。そして、現代まで伝統が続く英文学研究の学問としての体系化が、これら20世紀初頭の批評家らによってなされてきたことを鑑みれば、現代にまで続く「ヴィクトリア朝時代における詩の不在」という認識が、20世紀初頭の批評基準からの影響を強く受けたもの、さらに言えばモダニズム的詩観に根差したものであることは明らかだといえる。そこで本研究では、これまで20世紀初頭の批評基準というフィルターを通してのみ捉えられていた19世紀ヴィクトリア朝詩学を、当時の文芸批評や詩学論議を精査することによって再定義しようと試みる。

この「ヴィクトリア朝詩学の再定義」という、やや大胆すぎるようにも見える目論見への可能性を広げてくれるのが、後者の意味での「21世紀的視座」、つまり最新の研究環境の活用である。20世紀につくられた批評基準というフィルターを取り除くためにまず必要な作業は、19世紀当時どのような詩学論議がなされていたかを調査することである。19世紀イギリスの文芸雑誌は、当時の知識人らが、書評、評論、フィクション、詩など、あらゆる種類の著作を発表した場であり、当時の文化の要として機能してい

た。そして、ヴィクトリア朝詩学を理解するには、この一次資料にアクセスすることは必須だといえる。従来こうした研究は、資料収集の都合上、英米に在住する研究者でなければ着手することの困難な領域であったが、近年のデジタル・アーカイヴの広がりにより、事情が大きく変化し始めている。例えば Google Books に代表される書籍検索サービス²の拡大により、多くの書物をいわばファクシミリのように、現物そのままのレイアウトで閲覧することが可能になり、従来のマイクロフィルムよりはるかに鮮明な資料を、インターネットを通じて誰でも簡単にアクセスできるようになったのである。このような研究環境の変化を踏まえ、デジタル・アーカイヴを最大限に利用した上で、ヴィクトリア朝詩学の再定義を試みるというのが、本研究の見取り図である。

しかし、この最新の研究環境というのも、既に確立されたものというわけではなく、現在もまだ、世界各国の研究者の間で議論が続いている。また、多くの研究機関がさまざまなプロジェクトを立ち上げ、より信頼性のあるデジタル・アーカイヴをつくるべく試行錯誤を繰り返している。一方、日本のヴィクトリア朝文学・文化研究の分野では、デジタル・アーカイヴへの研究的関心が十分に払われているとは言えない。だが、デジタル・アーカイヴの広がりや、海外でイギリス19世紀の文学・文化を研究する者に、新たな研究方法の可能性を示しうるものだと考えられる。

そこで本稿では、近年注目されつつある「デジタル人文学」(Digital Humanities) という用語も視野に入れながら、デジタル・アーカイヴを利用した研究の方法論を模索する目的で、特にヴィクトリア朝文学・モダニズム文学の研究分野で、デジタル・アーカイヴをめぐる、どのような議論がなされているかを概説する。議論の手順としてはまず、デジタル・アーカイヴの広がりやヴィクトリア朝文化研究に大きな影響を与えうるという根拠を簡単に説明する。次に、19世紀文化研究の文脈の中で、当時の文芸雑誌がなぜ注目され始めたのか、文芸雑誌研究の歴史と変遷を概説する。さらに、本稿のキーワードの一つである「デジタル人文学」の意味するところ、そして、デジタル人文学研究の開拓によって期待されていることを説明した後、イギリスヴィクトリア朝文学、モダニズム文学の研究分野で、現在までにどのようなデジタル化プロジェクトが考案され、進められているのかを紹介する。その上で、海外にいる研究者の一人として、デジタル・アーカイヴを利用したヴィクトリア朝文芸雑誌研究に今後どのように参画すべきか、その可能性と重要性を提言したい。

1. ヴィクトリア朝文化研究とデジタル人文学の現在

上で紹介したようなデジタル・アーカイヴの広がりや恩恵を最大限に受けうるのは、ヴィクトリア朝文化研究であるといえる。その理由の一つには、19世紀研究の一次文献のほぼ全ての著作権が切れ、パブリック・ドメインになっているという点が挙げられる。2004年12月に Google Books (当時 Google Print) は、'Google Print Library Project' を

立ち上げ、ハーバード大学、スタンフォード大学、ミシガン大学、ニューヨーク公立図書館、オックスフォード大学と提携を結び、これらの図書館の所蔵する資料をデジタル化していくことを発表した。なかでもオックスフォード大学ボドリーアン図書館との協定では、同図書館が所蔵する19世紀の出版物全てをスキャンする計画が進められている³。このほか Internet Archive では、アメリカやカナダの大学図書館より公開されたパブリック・ドメインの文献を容易に検索することができ、さらにオンラインで閲覧できるだけでなく、PDF、DjVu など、様々な形式でテキストを入手することが可能になっているのである⁴。

19世紀文化研究が、デジタル・アーカイブの恩恵を大いに受けうるという第二の理由は、当時出版界、とりわけ定期刊行物の出版に大きな変革を見た時代だからである。18世紀に誕生し、19世紀において印刷の能率化、識字率の向上、市場競争などを背景に発展を遂げたジャーナリズムは、多岐にわたる議論の場を提供すると同時に、独自の文化を確立する。その影響力は、1896年刊行の『十九世紀文学史』(*A History of Nineteenth Century Literature*)において、ジョージ・セイントツベリー (George Saintsbury, 1845-1933) が説明しているとおりである。

おそらく19世紀の英文学史の特徴として、定期刊行物⁵の発展ほど際立って独特な特徴はないであろう。それは小説の普及や多様化にも勝る。というのもこれは、小説の広がりのように一つの分野だけにかかわった問題ではなかったからである。定期刊行物は、無限に増殖し続けただけでなく、文化のあらゆる分野に浸透していき、あらゆる分野をそれ自身の中に取り込んでいったのである。(Saintsbury 1896:166)

一般大衆向けに作られた安価なペニー・ペーパー(日刊新聞)から、中産階級層がステイタス・シンボルの一つとして購入した豪華な装丁のアンニヤル(年刊書)に至るまで、無数の定期刊行物が発行された時代が19世紀だと言えるのである。そして、そのような文献の多くを、デジタル・アーカイブを通して容易に入手できるようになった現代、我々はヴィクトリア朝時代独特の情報社会を追体験できるようになったと言えるかもしれない。

ただ、注意しなければならないのは、デジタル・アーカイブの拡充に伴うのが、単に一次資料が簡単に手に入るようになったという、明るい展望だけではないという点だ。問題点としてまず挙げられるのは、これまでのところ、資料のスキャンが機械的に行なわれているにすぎないため、個々の資料によって品質に格差が生じるという点である⁶。また、いまだ発展途中にあるデジタル・アーカイブ上では、各資料が図書館にある書架のように、年代順や資料番号順に整然と並べられているわけではなく、それらを利用しようとする研究者には、書誌学の知識や資料整理のスキルが求められることになる。さらに、先ほどはヴィクトリア朝時代の情報社会を追体験できるようになったと表現したが、実際には約百年をかけて出版されてきた刊行物が、2004年の 'Google Print Library Project' を皮切りに、わずか数年で公開されているわけで、我々には溢れる情

報をどのように処理し、取捨選択するべきかという問題も投げかけられていることになる。

このような状況を受けて、最近では「デジタル人文学」という用語が多く見られるようになり、英米では、新たにいくつかの研究機関が設立されている。例えば全米人文科学基金 (National Endowment for the Humanities、以下 NEH と表記) は、2007年よりデジタル人文学事務局 (Office of Digital Humanities) を設立し、デジタル人文学分野の萌芽的研究に対して支援を行っている⁷。ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ (University College London) は、2010年2月に「デジタル人文学センター」(UCL Centre for Digital Humanities) を立ち上げ、翌2011年9月からは、デジタル人文学の修士課程が新たに開講される予定である⁸。また Google は、2010年7月14日の公式発表で、「デジタル人文学研究助成金」(Google's Digital Humanities Research Awards) の公募から選ばれた12のプロジェクトに対し、資金援助をするほか、「Google のもつツールや専門技術・知識等」を提供することを発表した (国立国会図書館 2010年8月5日)。Google によれば、「Google Print Library Project」に始まった書籍のデジタル化は出発点にすぎず、今後は「人文学研究者とコンピューター・サイエンティストによって、これらデジタル化されたテキストを分析するという膨大な作業」が必要であり、そのためには「とりわけ人文学研究者が、何千、何百万もの文献にあたることを要する研究課題にも答えるような、量的研究方法の活用に着手する」ことが期待されるという (Google 14 July 2010)。以上の動向を見ると、「デジタル人文学」は、研究・教育両面で注目されつつある新たな分野であると言えよう。

では、「デジタル人文学」とは、具体的には何を意味し、その研究分野の開拓によって、何が期待されているというのだろうか。それについての説明は後で行なうことにし、次にヴィクトリア朝文芸雑誌研究の歴史を概説したい。

2. ヴィクトリア朝文芸雑誌研究の歴史

先に引用したセインツベリーによる、ヴィクトリア朝末期の証言にあったとおり、ヴィクトリア朝時代の定期行物の発展は、当時を特徴づけるほど目覚ましいものであったが、不思議なことに19世紀文芸雑誌それ自体への研究的関心が払われるようになったのは、20世紀中葉以降のことである。では、なぜ20世紀前半に文芸雑誌の重要性が無視されるという空白の期間が生じたのか。これにも実は、20世紀初頭の批評家らが学問分野としての英文学研究の確立に尽力する際、19世紀文芸雑誌の存在を敢えて隠蔽したという事情が深くかかわっている。ローレル・ブレイク (Laurel Brake) はこれに関して、『征服された知識たち』(*Subjugated Knowledges*, 1994) の中で、次のように説明している。

英文学を学問分野として確立したいがために、次のような試みがなされた。つまり、文学と雑誌の間の結びつきを断ち、当時両者の間にあった親密で具体的な結びつき

や間テキスト性を曖昧にしてしまうことである。この征服は現在に至るまで優勢を誇っている。その結果、現在、大学のシラバス上に雑誌がのぼることがあるにしても、それは通常「大衆文化」やメディア学などの題目の下でのことであり、それも20世紀雑誌の研究に限られるのが一般である。英文学研究の専門化は、雑誌研究の専門化と並行して行なわれ、同じく存在の危機に立たされていた雑誌は、その領域を「マス」メディア誕生の時代からに限定することにした。つまり、20世紀以前の雑誌の歴史をシラバスから除外することで、文学やその他の学問分野からの差別化を図ったのである。(L. Brake 1994: xiv)

この事情が変化し始めるのは20世紀中葉以降のことだ。きっかけは、『ウェルズリー・インデックス』(*Wellesley Index to Victorian Periodicals 1824-1900*)の刊行にある。これはウォルター・ホートン(Walter Houghton)を編集代表者に、ヴィクトリア朝時代に刊行された主要な定期刊行物の記事を索引にしたものである。ホートンは1959年発表の小論の中で、ヴィクトリア朝時代の歴史研究における定期刊行物の重要性を、次のように主張している。

歴史学者にとってのヴィクトリア朝時代の定期刊行物の重要性は、いくら主張しても誇張にはなるまい。数十もの雑誌や、それに含まれる数千もの記事には、あらゆる分野における当時の考え方や、あらゆる主要な問題に対する様々な意見(右翼から左翼まで)が含まれているのである——得られる情報の範囲は、多くの場合、そのトピックについて書かれた単著の書籍には遥かに及ばないほど、多岐にわたる。(Houghton 1959: 557)

そして、「近年になってようやく、19世紀を研究する人々が、ヴィクトリア朝時代の定期刊行物があらゆる研究領域(芸術、経済、歴史、文学、哲学、神学、科学)に有益な素材を含み、歴史知識のための豊かな資料になることに気づき始めた」にもかかわらず、「適切な索引が存在しないために、この資料がほとんど活用されていない」(Houghton 1959: 559)点を指摘し、雑誌記事の索引化という一大事業に取りかかったのである。この『ウェルズリー・インデックス』は、1966-89年に五分冊で刊行された後、1999年にはCD-ROMで電子版が刊行された。また、2006年以降は、オンライン版でも公開されている⁹。

『ウェルズリー・インデックス』に特徴的なのは、単に雑誌記事のタイトルをリスト化しただけでなく、書評であればその対象となる書籍名でも調べられるように索引を用意した他、著者名の索引も用意したという点である。また、これまで著者名が明らかでなかった記事(匿名記事やペンネームで書かれた記事)の著者を、できる限り追跡し、明らかにした。ホートンも指摘しているとおり、「匿名やペンネーム(イニシャルを含む)の使用は、ヴィクトリア朝時代の雑誌では一般的になされていた慣習であり、当時

発表された記事のうち、記名されているものは3パーセントだけ、1870年以前であれば1パーセントに近かった」(Houghton 1959: 561)とされている。そして、雑誌記事に本名を掲載しない理由には、政治的意味合い、イデオロギ-的意味合い、商業的な目的など、多くの事情が含まれるため、著者名をつきとめることは雑誌文化の本格的な研究には不可欠だといえる。以上のような背景のもと、『ウェルズリー・インデックス』の刊行は、19世紀雑誌記事の本格的な研究、量的研究や統計化への道筋を拓いたのである。

これに並行して、1968年には「ヴィクトリア朝定期刊行物研究学会」(Research Society for Victorian Periodicals)が設立された。この学会は1960年代の学際的研究への関心の高まりを背景に、『ウェルズリー・インデックス』のプロジェクトに携わる研究者を中心に設立された。歴史研究、文化研究、文学研究など、様々な角度からヴィクトリア朝時代の雑誌を資料に利用した研究の可能性を模索している。当学会に特徴的なのは、年次大会や学会誌上で、単に研究成果が発表されるだけでなく、研究方法論や、教育の場でのヴィクトリア朝雑誌の利用方法なども常に議論の対象になっているという点である。その成果の代表的なものとしては、『ヴィクトリア朝定期刊行物—研究案内』(*Victorian Periodicals: A Guide to Research*; 初巻1978年, 第2巻1989年)(Vann 1978, 1989)、『ヴィクトリア朝定期刊行物印刷—標本調査と測量調査』(*The Victorian Periodical Press: Samplings and Soundings*)(Shattock 1982)、『ヴィクトリア朝雑誌を調査して』(*Investigating Victorian Journalism*)(L. Brake, A. Jones, and L. Madden 1990)の刊行、および、学会誌『ヴィクトリア朝定期刊行物レビュー』(*Victorian Periodicals Review*)での特集「定期刊行物の教授法」(‘Special Issue: Periodical Pedagogy’)(Mangum 2006)が挙げられる。

このように、ヴィクトリア朝時代の雑誌を材料に、研究方法論を意識した学際的研究が進むなかで、副産物として現われたのは、雑誌それ自体に対する認識の変化である。ホートンが1966年に『ウェルズリー・インデックス』を出版した際、彼の想定では、「レビューや雑誌が、その当時進行中の状況を反映したものであるため、それらがある特定の時期や短い時代の区切りの中で、どのような世論が存在したかを研究する上で不可欠になる」というにとどまっていた(Houghton 1999: Introduction to Vol.1 of the Print Edition; 傍点は論者による)。しかし、それから約四半世紀後、上掲の1990年刊行の『ヴィクトリア朝雑誌を調査して』の中で、マーガレット・ビーサム(Margaret Beetham)は、ヴィクトリア朝時代の雑誌に対する認識が当初とは変化している点を、次のように説明している。

歴史学者らが、文学研究者や批評家も含め、定期刊行物が近現代の歴史研究に対しても特別な価値に気づくようになって久しい。19世紀の雑誌や新聞は、経済や政治、文学に関する基本資料となる。しかし、定期刊行物は過去を覗くための窓でもなければ、過去を映す鏡でもない。雑誌や各記事は、作家や編集者、出版者や読者が自分たちの社会を理解しようと従事する場であり、自分たちの世界を意味のあ

るものにするために悪戦苦闘する複雑な過程の一部だったのだ。(Beetham 1990: 40; 傍点は論者による)

リンダ・ヒューズ (Linda K. Hughes) はこうした認識の大きな変化が、上掲の『ヴィクトリア朝定期刊行物—研究案内』の初巻(1978年)と第2巻(1989年)刊行の間の11年のうちに起こったと分析する。

定期刊行物は、以前はヴィクトリア朝文学や歴史を理解するために不可欠な情報源あるいは背景理解のための資料として認識されていた。しかし、1980年代末になってそれらは、歴史的な出来事や文学テキストが形成される素地となる文化を、単に反映するものではなく、文化を構築するものとして理解されるようになったのである。(Hughes 2006: 317; 傍点は論者による)

以上、概観したように、ヴィクトリア朝時代の文芸雑誌は、20世紀初頭に英文学研究の確立という文脈の中で取りこぼされ、一度は顧みられない時期があったが、20世紀中葉になってその資料的価値が注目されるようになった。きっかけをつくったのは『ウェルズリー・インデックス』の刊行である。しかし、この索引の成立は、単にヴィクトリア朝雑誌を歴史や文化、文学研究の資料として利用可能にすることで新たな研究方法を開拓しただけでなく、雑誌が当時の社会や文化に果たした役割に対する見方をも一新させたといえる。新たな研究ツールの発見・成立は、研究方法のみならず、概念やイデオロギー、理論をも変化させうる。そのように考えると、現在のデジタル・アーカイヴの利用拡大が、歴史や文化、文学研究の概念にどのような変化をもたらすかに注目することは、必要なことであろう。その点を次項で「デジタル人文学」に注目して考察することにした。

3. デジタル人文学をめぐる議論

既に少し言及したように、デジタル人文学は、デジタル・アーカイヴの急速な広がりを背景に、研究・教育の両面からの考察の必要性を受けて生まれた用語である。この用語がいつから使われ始めたのか、その初出をたどることは不可能に近いが、英米文学の分野では、インターネットが普及し始めるとすぐに、こうした技術の導入が研究や教育にどのような影響を与えることになるのか、活発な議論がなされていたようである。例えばアメリカの現代語学文学協会 (Modern Language Association、以下 MLA と表記) の年次大会では、1996年頃から関連のシンポジアが毎年行なわれている¹⁰。いくつか例を挙げれば、以下のようなテーマのものがある。(最初の数字は MLA で用いている整理番号である)

- 87 Text Encoding and Textual Theory
- 187 Poetry and Computers I: Digital Poetics
- 247 Focusing on Editorial Scholarship at Century's End
- 418 Electronic Technology and Renaissance Materials
- 450 The Canon and the Web: Reconfiguring Romanticism in the Information Age
- 503 Editing for the Internet
- 567 Electronic Publishing and Scholarly Integrity
- 685 Teaching Electronic Research Methods
- 704 Poetry and Computers II: Hypertext and Poetry (ACHWeb)

これらのタイトルを概観するだけでも、コンピューターやインターネット、デジタル・アーカイブの導入が、単に研究方法に変化をもたらすだけでなく、文学理論や詩学、文学テキストやテキスト編集の概念、文学の教授法などにも変化を及ぼす可能性（あるいは危険性）に、当初から関心が向けられていたことが伺える。そして、こうした関心から派生した概念として「デジタル人文学」が注目されるようになったのである。

現在、デジタル人文学に注目するにあたって考察すべき論点は、次の三つに分類することができるだろう。そもそもデジタル人文学とは何かという点、なぜデジタル人文学という概念が必要なのかという点、そして、どのようにしてデジタル人文学を推奨すべきかという点である。まず、デジタル人文学の定義に関して、先述のロンドン大学デジタル人文学センターは、次のように説明している。

デジタル人文学研究は、デジタル技術と人文学が交差する場で行なわれる。その目的は、人文学分野とコンピューター科学およびそれに関連した技術分野の双方にとって、新たな種類の研究を可能にするようなアプリケーションやモデルを作り出すことである。また、こうした技術が文化遺産や記念団体、図書館、アーカイブ、デジタル文化などに与える衝撃をも考察の対象とする。(Terras 2010)

ここでは、デジタル技術と人文学研究が、双方から働きかけることにより、新たな研究の分野や方法、領域を開拓するという点にポイントが置かれているのである。

では、何故そのようなデジタル技術と人文学双方からの働きかけが必要だというのか。その点に関して、NEHのデジタル人文学事務局長ブレット・ボブレイ(Brett Bobley)は、同事務局の設立に際し、デジタル技術が人文学研究に与える衝撃が「形勢を一変させるほど(game-changing)」なものである点を強調して説明している。彼が指摘する、デジタル技術と人文学の交差によってもたらされる衝撃的な変化とは、以下の四点である。

- (1) 研究者と研究素材との関係の変化
- (2) テクノロジーに基づくツールや方法論の導入

- (3) 研究者と図書館、出版社(者)の間の関係の変化
- (4) 人文学分野における共同研究や学際的研究の高まり (Bobley 2008: 1)

ここで注目したいのは、(1)と(3)の点である。ボブレイは、この数年の間に、Google Books や Internet Archive などにより、多くの書籍や新聞、雑誌がデジタル化され、市外・国外を問わず、世界各地にある多くの研究素材を、ウェブを通して入手することが可能になりつつある一方で、人文学者たちは「まだ、こうした山積みのデータを、人文学研究の促進に、どのようにして利用可能にできるかどうか、その表面を切り込もうとし始めたにすぎない」と指摘する (Bobley 2008: 2)。そして、膨大なデータを前にして、デジタル人文学が考察すべき点に関しても、いくつかの問題提起をしている。

それによって、どんな新しい知を得られるか？これらのデータが、どんな新しい疑問点、問題点を我々に促すことになるのか？これらのデータは、どのようにすれば精読するに熟した研究素材として役立つのか？どんな古い理論が再び議論に持ち上がり、どんな新しい理論が投げかけられることになるのか？これらが、我々が取りかかる問題の一例である。(Bobley 2008: 2)

もう一点、デジタル技術と人文学の交差によってもたらされる変化のうち、看過できないのは、ボブレイが指摘する(3)の点、つまり、研究者・司書・出版者の関わり方である。ボブレイは図書館学 (library science) を、「デジタル人文学にとって重要な役割を担う」ものとして重視している (Bobley 2008: 3)。それは既に本稿で言及したように、目下デジタル・アーカイブ上の資料は、図書館の書庫のように整然と分類・管理されているわけではないからである。彼は、研究者が資料を編集し、出版社が出版し、図書館で処理され、管理されていた30年前と比べ、現在では研究者・出版者・司書の役割分担は不鮮明になりつつある点を指摘する。そして、このようなデジタル時代にあるべき三者の関係を、次のように強調している。

研究者は、単に本の内容にのみ責任を取るのではなく、ある意味では出版者の役割も司書の役割も担うようになったことになる。こうした役割分担が不鮮明になるのだから、研究者と司書が共同で働き、研究成果が適切に作られ、出版され、共有され、保存されるように見届けることが必要なのである。(Bobley 2008: 3)

このように、(1) 研究者と研究素材、(3) 研究者・司書・出版者 の関係の変化が、それまでの形勢を一変させるほどの衝撃のあるものであるという点が、デジタル人文学の必要性を促すとすれば、次に重要なのは第三の論点、つまりデジタル人文学をどのように推奨すべきかを考慮することであろう。それは、ボブレイの指摘する(2)、(4)の点にも関わることである。

先に本稿の第1項でも述べたように、デジタル・アーカイヴの拡充には、明るい展望だけでなく、いくつかの問題点も孕んでいる。第一に、Google Books などによる大量デジタル化 (mass digitization) の弊害として、資料の品質に格差があるという点がある。一例を挙げよう。本稿でも資料として利用したジョージ・セインツベリーの『十九世紀文学史』は、Internet Archive 上に14件のデータが挙げられている¹¹。このうち、どれを資料として用いるかは、閲覧者の判断に委ねられることになる。筆者がたまたま最初に挙げられているものを開いて読んでいたところ、【図1】のように、画像が不鮮明で判読できないページに遭遇した¹²。これは明らかに機械的なスキニングのために見落とされた不良箇所である。これは単に一冊の書籍の一ページがスキニ

ングに失敗したという

以上に、実際には深刻

な問題である。という

のも、図書館資料の大量

スキニングの背景には、

多くの資料を一般公開

する以外に、資料をデジ

タル保存するという目的

があるからである。いくら

百年前の資料を現物その

ままのレイアウトで保存し、

閲覧できるようになった

とはいえ、このような不

良箇所があれば、資料

としての価値は無に等し

くなってしまふ。これを

防ぐためにも、デジタル

技術のなるように任せる

のではなく、人文学や

図書館学の研究者が積極

的に関わり、どのような

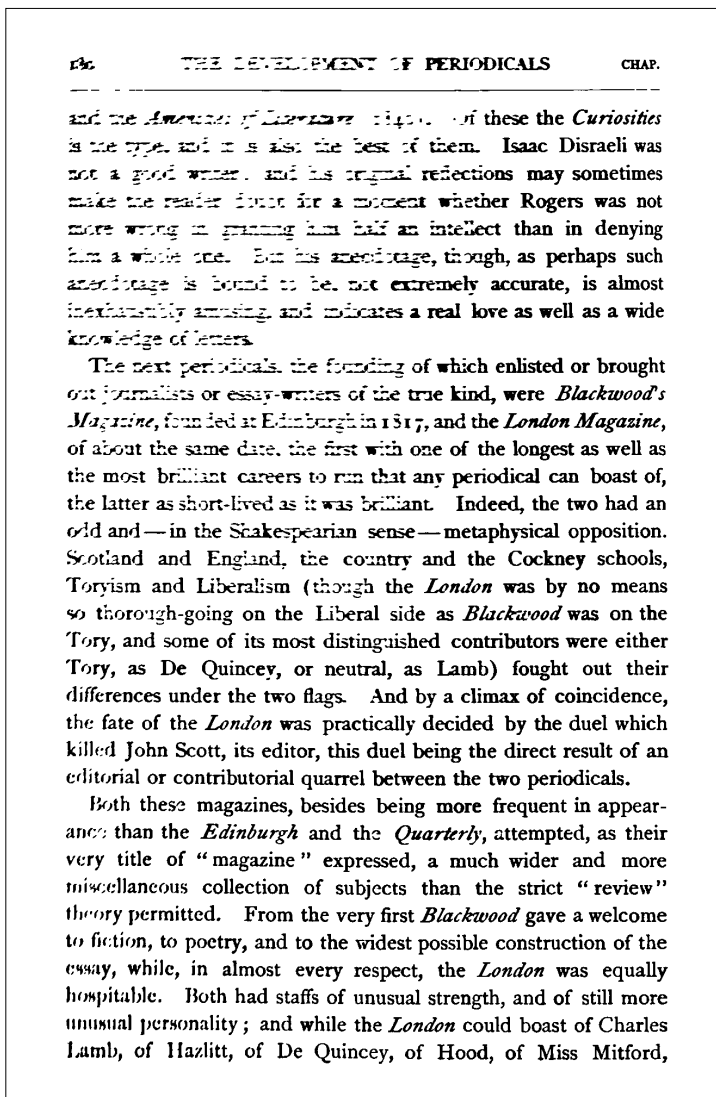
資料保存と資料提供が必

要であるかを論議する

ことは大切なのである。

大量デジタル化の第

二の問題点は、Internet



【図1】 Internet Archive より 画像が不鮮明なページの例

Archive や Google Books などでは資料が年代順や資料番号順に並べられているわけではないという点である。これは特に定期刊行物などを利用した研究にとっては致命的だといえる。なぜなら現状では、あるテーマについて調査するとき、関連する雑誌をブラウズできるわけではなく、検索にヒットしたもののみ利用可能であるという偶然性に依拠することになるからである。これでは体系的で生産的な研究は期待できそうにない。この点に関して、19世紀・20世紀英文学の研究者であるシャフクワット・トウィード (Shafquat Towheed) は、警鐘を鳴らしている。彼もまた、Internet Archive や Google Books の普及により、多くの公共図書館がデジタル化の済んだ「19世紀の小説や新聞等を、転売したり処分したりする過程にある」(Towheed 2010: 141) という状況を危惧した上で、大量デジタル化の資料整理が不十分である点を批判する。

格付けもされず、補助的な情報も用意されていない未分化のデータを提供することにより、大量デジタル化プロジェクトはある点では19世紀の読書体験の文脈を再構築している (re-contextualize) といえる。しかし、それらによって新聞などがどのように読まれたのか、正しく再構築されてはおらず、かえって容易に検索できるような脱文脈化されたコンテンツ (decontextualized content) を提供してしまっているのだ。(Towheed 2010: 143)

このように、大量デジタル化の動きは、19世紀文化を研究する者にとって、一次資料へのアクセスを容易にさせ、これまでは着手できなかったような新たな種類の研究への可能性を示す一方で、現行のデジタル・アーカイヴでは資料の品質が必ずしも一定の水準を満たしているとは言えず、十分に資料整理されない状態で大量のデータが雑然と存在しているため、ともすると当時の情報社会を文脈化させる一助となるどころか、脱文脈化された一次資料を提供するだけになりかねない危険性をも孕んでいる。そのためにボブレイが指摘しているような(2)新たなツールや方法論の導入、(4)人文学分野での共同研究や学際的研究が必要とされるのである。そして、それが現在、多くの研究機関が、より信頼性のあるデジタル・アーカイヴを作るべく、さまざまなプロジェクトに取り組んでいる理由の一つであると言えよう。次項では、再び19世紀文芸雑誌研究と文学研究の場合に話題を戻し、同分野でどのようなデジタル化プロジェクトが進められているのか紹介したい。

4. 文芸雑誌デジタル化プロジェクト

ヴィクトリア朝文化研究分野の学際的研究の学術雑誌『ヴィクトリア朝文化』誌 (*Journal of Victorian Culture*) は、2009年より論文・書評のコーナーの他に、毎号デジタル・フォーラム (DIGITAL FORUM) のコーナーを設け、デジタル資料が19世紀文化研究

にどのような変化をもたらすかを議論する場になっている。このコーナーが始まる前の、設立準備の討論コーナー (ROUNDTABLE) で、19世紀英詩の研究者ジェローム・マクガン (Jerome McGann) は、「未来はデジタル」(‘The Future is Digital’) という題目の、いわばマニフェスト的小論を発表している。彼は、人文学を取り巻く環境も今やデジタル化しつつあることを指摘し、この環境の変化の中でどのような制度改革が求められているか、そして、こうした変化と従来の書誌学の伝統をどのように統合するべきかという問題に取り組むことは、差し迫ったことであり、緊急の問題であると訴える。それにもかかわらず、「デジタル分野への知識の少なさをゆえに、大半の人文学研究者が、これに関する話し合いや活動の周縁に追いやられている」現状を憂慮し、「この分断は、社会的にも文化的にも深刻な事態である」と考える (McGann 2008: 80)。そして「実際に学際的な共同研究に取り組まない限り、デジタル技術のもつ力と限界を理解することはできない」と、人文学研究者からの積極的な参加を呼びかけている (McGann 2008: 81)。

また、同討論の中で、19世紀演劇の研究者リチャード・ピアソン (Richard Pearson) は、大英図書館のカタログ作成や『オックスフォード英語辞典』の編纂に見られるように、ヴィクトリア朝時代が「新しい研究の基盤構造の開発に長期的な投資の可能性を見た」(Pearson 2008: 89) 時代であると指摘し、現代の「オンライン化プロジェクトが本当にヴィクトリア朝研究の学際的な性質を反映するのであれば、異なる研究分野からの多様なニーズに対し、開放的である必要がある」と述べ、プロジェクトの「公開性、多様性、持続性」の重要性 (the importance of the openness and diversity of usage [...] as well as their long-term sustainability and management) を強調している (Pearson 2008: 93)。

マクガンが指摘するような学際的な研究や共同研究の必要性や、ピアソンが主張するようなデジタル・アーカイブの公開性、多様性、持続性の必要こそ、現在、多くの研究機関が独自のプロジェクトに取り組んでいる所以の一つだと言えるだろう。では以下に、現在までに行なわれているデジタル化プロジェクトのいくつかを紹介したい。近年ではかなり多くのプロジェクトが進められているため、ここではヴィクトリア朝及びモダニズムの文芸雑誌に関するものに限定することとする。

(a) ILEJ - Internet Library of Early Journals

<<http://www.bodley.ox.ac.uk/ilej/>>

バーミンガム大学、リーズ大学、マンチェスター大学、オックスフォード大学共同で、1997-99年に行なわれたプロジェクトである。当時はまだ一次文献のデジタル化はあまり進んでいなかったため、当プロジェクトでは18世紀、19世紀に刊行された雑誌から主要なものを各三誌ずつ選び、各誌20年ごとに限定して、書誌情報とともにインターネット上にファクシミリを無料公開することを目的としている。スキニングの元にした資料が図書館で合本されたものやマイクロフィルムであるため、必ずしも鮮明な画像ばかりとはいえない点、また余白がトリミングされているため、現物そのままのレイアウト

ではない点など、今日から見ると問題点はいくつかあるが、デジタル化プロジェクトの黎明期の資料としては重要な取り組みだったといえる。

(b) NCSE – Nineteenth-Century Serials Edition

<<http://www.ncse.ac.uk/>>

ロンドン大学（パークベック、キングズ両カレッジ）と大英図書館の共同プロジェクトとして2005-07年に行なわれた。19世紀の主要な文芸雑誌と新聞を六誌選び、ファクシミリ化したものである。当プロジェクトに特徴的なのは、図書館などで保管している資料では合本の際にカットされてしまっているような帯封や前付、後付、広告なども含んでおり、各資料のサイズ等も記載している点である。前に紹介した ILEJ プロジェクトと比較すると、デジタル化の目的として、現物そのままのレイアウトで資料を保存・公開することの重要性が注目され始めたという思潮が反映されているのを見て取ることができる。

(c) The 1890 Online <<http://www.1890s.ca/>>

ごく最近始まった19世紀文芸雑誌のデジタル化プロジェクトに、‘The 1890s Online’がある。これは、2010年よりカナダのライアソン大学を中心に始まったプロジェクトである。当プロジェクトでは、世紀末文学・文化研究のための一次文献のファクシミリを公開するほか、それらの出版背景や当時の受容などについての情報も付け加えられることになっている。世紀末から20世紀初頭にかけては、リトル・マガジンと呼ばれる同人誌的な性格をもった文芸雑誌が多く創刊された時期である。そして、雑誌ごとに異なる文学観・芸術観を有しているため、寄稿者がどんな人物なのか、また、どういう読者層に読まれたのかといった背景を知ることは、より重要になる。一次資料だけでなく、当時のコンテキストも理解できるようなアーカイブの作成というのは、先に見たトウィードのように、脱文脈化されたコンテンツの提供をおそれるという意見が反映されているといえる。

(d) Modernist Journals Project <<http://dl.lib.brown.edu/mjp/>>

アメリカのブラウン大学とタルサ大学の共同プロジェクトとして1995年から続いている。このプロジェクトでは、1890-1922年に刊行されたモダニズム文学の文芸雑誌のアーカイブを提供するほか、これらの資料を研究・教育にどのように役立てるかといった、資料の利用についての議論の場も設けている。これは、マクガンの提唱していたような学際的研究や共同研究の可能性を提供している。

(e) NINES – Nineteenth-century Scholarship Online

<<http://www.nines.org/>>

最後に、文芸雑誌のデジタル化プロジェクトではないが、デジタル・アーカイヴを利用した19世紀文化研究・文学研究の発展に大きな役割を担っているウェブサイトとして、NINESを取り上げたい。これは‘Networked Infrastructure for Nineteenth-century Electronic Scholarship’の頭文字をとって名づけられた組織で、19世紀研究のためのアーカイヴのリンクを張るだけでなく、デジタル技術を利用した研究の議論かつ実践の場として機能しており、まさに19世紀研究の「インフラストラクチャー」になることを目指した組織である。NINESは2003年にマクガンを中心メンバーに設立されており、彼の提唱する「デジタル技術の力と限界」を試すための「学際的な共同研究」の実践の場であることが分かる。このウェブサイトの現在の代表管理者ダナ・ウィールズ (Dana Wheelles) は、NINESの目的と特徴を次のように説明している。

NINESの当初からの使命は、単にウェブサイトを連盟化するだけではなかった。我々の目標は、これらの資料のまわりに、ある種のコミュニティを育て上げ、それらのウェブサイトを、各研究機関という枠組を超えてサポートするネットワークを確保することにあった。我々はユーザーに、「検索 (search)」を超えて「調査 (research)」をするよう促したいと思っていた——つまり、単にコンテンツを受身的に利用する消費者になるのではなく、自身の洞察を「NINESの熟達 (NINES-verse)」の中に寄与し、それらのまわりに新しい研究領域を創り出してほしいと考えてきた。NINESのような場こそが、デジタル人文学についての新しい対話の方法を提供しうるだろうと考えたのである。(Wheelles 2010: 145)

このように、単にアーカイヴを閲覧できるだけでなく、研究者が相互に洞察を提供し合い、デジタル資料を「サーチ」するだけでなく「リサーチ」もできるようになる環境こそ、今後のデジタル人文学時代のアーカイヴの在り方になっていくのではないだろうか。

おわりに

本稿では、ヴィクトリア朝文化の新しい研究方法を提供しうる領域として、文芸雑誌研究の歴史と、デジタル・アーカイヴをめぐる近年の動向を概観した。それにより明らかになったのは、現在、Google BooksやInternet Archiveのような大量デジタル化プロジェクトと、各研究機関が独自に進めるデジタル・アーカイヴの二種類が存在しているということである。大量デジタル化の動きは、多くの文芸雑誌や印刷物が刊行された19世紀の情報社会と相似しており、それによって海外にいても多くの一次資料を閲覧で

きるようになったという点で、利点は大きい。しかし、これらを効果的に利用するには、書誌学や資料整理のスキルが必要であり、さらに、それらの資料を当時の文脈を無視して利用することのないよう、十分に注意が必要である。これが、近年デジタル人文学の重要性が強調されるようになった背景であり、また、多くの研究機関がより信頼性の高いアーカイブの確立を目指して現在も取り組んでいる所以である。

こうした動きを、海外でヴィクトリア朝文化を研究する者である我々は、外国で起こっている一研究動向にすぎないとしてただ傍観しているわけにはいかないだろう。なぜならこの動向は、単に新しい研究の領域や方法を提示するだけでなく、研究の在り方それ自体を変えてしまう可能性があるからだ。歴史学者トム・シャインフェルト (Tom Scheinfeldt) は、「20世紀後半の歴史言説では、概念の連続と理論の枠組が支配的であった」のに対し、現代は「新たな研究の時代に入りつつある」と考える。それは、研究が「概念によって支配されるのではなく、もう一度知を組織化すること (organizing knowledge) が支配的になる」ような時代である。そして、そのような現状を指して「イデオロギーの日没、方法論の夜明けか？」(Sunset for Ideology, Sunrise for Methodology?) と表現している (Scheinfeldt 13 March 2008)。シャインフェルトの表現がやや誇張すぎるにしても、現在急速に進みつつあるデジタル化の動きは、それほど大きなパラダイム・シフトを引き起こしうる。ヴィクトリア朝文芸雑誌研究でいえば、『ウェルズリー・インデックス』の刊行が単に新たな研究方法を開拓しただけでなく、雑誌に対する見方をも一新させたのと同様、デジタル人文学の広がり、人文学研究の方法を変えるだけでなく、ヴィクトリア朝文化に対する見方をも変えていく可能性があるのである。このように考えると、我々にはデジタル人文学が新たな研究方法の可能性を広げてくれるという、受身的な恩恵を被るだけでなく、世界各地にいる研究者が責任をもってこれらの動きを観察し、積極的に議論に参加していくことが必要になるのではないだろうか。

本稿を執筆した動機には、人文学分野にもインターネットが普及し始めてから、デジタル・アーカイブをめぐる近年の動向に及ぶまでの経緯を、整理するのを感じたことその他に、現在の動向を記録しておく必要があるのではないかと考えたことがある。今回の調査に伴って明らかになったことは、本年(2010年)に入ってからだけでも、デジタル人文学に関していくつかの大きな動きが起こっているということである。本稿の第1項で紹介したような、Googleによるデジタル人文学分野への研究助成は、大量デジタル化されたアーカイブの改善に何らかの成果を生み出すことになるだろうし、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジで始まったデジタル人文学教育への取り組みもまた、同分野の発展に貢献するものと期待される。2010年はデジタル・アーカイブの、また、デジタル人文学の一つ節目の年になるのかもしれない——そう感じたのが、本稿を執筆した動機である。もちろん、これらの動きがそれほど大きなものなのかどうかは、現時点で判断できないことではある。今できるのは、上述のように、こうした動向を観察し続け、かつ積極的に議論に参加することだ。そして、議論に参加するためには実際のアーカイブを活用してみることが重要である。デジタル・アーカイブ使って、どのような研

究が可能になるのか、それは今後、実践として資料を取り入れていくことによって、さらに検討することにしたい。

〈注〉

¹ 例えば英文学研究の祖の一人と目されるF・R・リーヴィス(F. R. Leavis, 1895-1978)は、文芸批評や大学教育に関する著作や講演の中で、幾度となく「現代における文化の苦境 (plight of culture today)」(Leavis 1972: 143)を訴えていたが、そうした彼の考えの根底には、詩がかつてのような社会的機能を失ってしまったことへの懸念が存在する。この文脈の中でリーヴィスは、ヴィクトリア朝時代の詩を名指しで批判している。

『オックスフォード・ヴィクトリア朝詩集』(*The Oxford Book of Victorian Verse*)の後半部を読み進めているうちに導かれる結論は、ここ40年から50年の間に何かの間違ってしまったのだということだ。(Leavis 1932: 6)

19世紀の詩は、夢の世界を創ることだけに専念してしまっている。(Leavis 1932: 10)

『オックスフォード詩集』を読み進めれば読み進めるほど、時代はその才能を生かし切れていなかったことが明らかになってくる。(Leavis 1932: 21)

リーヴィスのこうしたヴィクトリア朝詩観が、モダニズム詩人であり批評家であるT・S・エリオット(T. S. Eliot, 1888-1965)の影響のもとにあることは明らかである。というのもエリオットは、1921年のエッセイ「アンドリュー・マーヴェル」(‘Andrew Marvell’)の中で、同様にヴィクトリア朝詩を次のように批判しているのである。

夢の世界を構築しようとする努力が、19世紀に英詩を全く異なるものに変えてしまう結果となったのだが、それにはどんな説明も得られようがない。いずれにせよその結果、19世紀の詩人は、マーヴェルと同じくらいの偉大さがあつたにせよ、より小さく取るに足りない人物になり下がってしまっているのである。(Eliot 1932: 301)

そしてリーヴィスの英文学研究への一番の功績が、代表作『偉大なる伝統』(*The Great Tradition*, 1948)に象徴されるような文学キャンノンの制定と、学問分野としての英文学研究の確立であったことを併せて考えると、モダニズム詩学の影響は、リーヴィスを介して現代にも残っているといえよう。

² Google Books <<http://books.google.com>>

³ 詳細は、‘History of Google Books’ (Google 2010)、オックスフォード大学図書館による公式発表 ‘Oxford-Google Digitisation Programme’ (Bodleian Library 21 March 2006)、BBCによる報道記事 ‘Google to scan famous libraries’ (BBC News 14 December 2004)を参照。

⁴ Internet Archive <<http://www.archive.org/details/texts>>

⁵ 本稿では「定期刊行物」、「雑誌」の二通りの用語を使っているが、どちらもほぼ同じ意味で使っていることを断っておく。英語では ‘periodicals’ (定期刊行物)の低位区分として ‘magazines’ (雑誌)、「reviews」(書評誌)、「newspapers」(新聞)などが存在するが、今回の議論ではこれらの区別は左程重要ではないため、「定期刊行物」も「雑誌」もほぼ同義語として使用している。

⁶ Google Booksなどの「大量デジタル化プロジェクト」(mass digitization projects)に関しては、インターネット上でアメリカの研究者らが多くの議論を行なっている。特にリサ・スピロ (Lisa

Spiro)による記事 'Digital Humanities in 2007 [Part 2 of 3]' が詳しい (Spiro 11 January 2008)。

⁷ NEH Office of Digital Humanities <<http://www.neh.gov/ODH/>>

⁸ UCL Centre for Digital Humanities <<http://www.ucl.ac.uk/dh/>>

⁹ The Wellesley Index to Victorian Periodicals, 1824-1900 - Information Site <<http://wellesley.chadwyck.com/marketing/index.jsp>> ただし、アカウントが必要。

¹⁰ ACH Sessions at MLA <<http://www.ach.org/mla/>>では、1996年以降、Association for Computers and the Humanities が協賛した MLA 年次大会のシンポジアをはじめ、MLA で行なわれたすべてのコンピューター関係のシンポジアのプログラムを閲覧することができる。

¹¹ Search Results for title: (a history of nineteenth century literature) <<http://www.archive.org/search.php?query=title%3A%28a%20history%20of%20nineteenth%20century%20literature%29>>, accessed 28 October 2010.

¹² Read Online of *A History of Nineteenth Century Literature* by George Saintsbury <<http://www.archive.org/stream/ahistorynineteen06saingoo#page/n194/mode/1up>>, accessed 28 October 2010.

〈関連ウェブサイト〉 (* 本稿で言及した順に表記している)

Google Books <<http://books.google.com>>

Internet Archive <<http://www.archive.org/details/texts>>

UCL Centre for Digital Humanities <<http://www.ucl.ac.uk/dh/>>

Office of Digital Humanities - National Endowment for the Humanities <<http://www.neh.gov/ODH/>>

The Wellesley Index to Victorian Periodicals, 1824-1900

<<http://wellesley.chadwyck.com/marketing/index.jsp>>

The Research Society for Victorian Periodicals <<http://www.rs4vp.org/>>

ACH Sessions at MLA <<http://www.ach.org/mla/>>

ILEJ - Internet Library of Early Journals <<http://www.bodley.ox.ac.uk/ilej/>>

NCSE - Nineteenth-Century Serials Edition <<http://www.ncse.ac.uk/>>

The 1890 Online <<http://www.1890s.ca/>>

Modernist Journals Project <<http://dllib.brown.edu/mjp/>>

NINES -Nineteenth-century Scholarship Online <<http://www.nines.org/>>

〈引用文献・参考資料〉

ACHWeb 'The ACH Guide to Humanities-Computing Talks at the 1996 MLA Convention', <<http://www.ach.org/mla/mla96/guide.html>>, accessed 28 October 2010.

- Arnold, Matthew (1968), *The Letters of Matthew Arnold to Arthur Hugh Clough*, ed. Howard Foster Lowry (Oxford: Clarendon Press).
- BBC News (14 December 2004), 'Google to scan famous libraries'
<<http://news.bbc.co.uk/2/hi/technology/4094271.stm>>, accessed 28 October 2010.
- Beetham, Margaret (1990), 'Towards a Theory of the Periodical as a Publishing Genre', in Laurel Brake, Aled Jones, and Lionel Madden (ed.), *Investigating Victorian Journalism* (London: Macmillan), 19-32.
- Bobley, Brett (2008), 'Why the Digital Humanities?'
<<http://www.neh.gov/whoweare/cio/odhfiles/Why.The.Digital.Humanities.pdf>>, accessed 28 October 2010.
- Bodleian Library (21 March 2006), 'Oxford-Google Digitisation Programme'
<<http://www.bodley.ox.ac.uk/google/>>, accessed 28 October 2010.
- Brake, Laurel (1994), *Subjugated Knowledges: Journalism, Gender & Literature in the Nineteenth Century* (New York: New York UP).
- Brake, Laurel, Aled Jones, and Lionel Madden (ed.), (1990), *Investigating Victorian Journalism* (London: Macmillan).
- Eliot, T. S. (1932), 'Andrew Marvell', *Selected Essays* (London: Faber and Faber), 292-304.
- Google (14 July 2010), 'Our Commitment to the Digital Humanities', *Official Google Blog*.
<<http://googleblog.blogspot.com/2010/07/our-commitment-to-digital-humanities.html>>, accessed 28 October 2010.
- (2010), 'History of Google Books',
<<http://books.google.com/intl/en/googlebooks/history.html>>, accessed 28 October 2010.
- Houghton, Walter E. (1959), 'British Periodicals of the Victorian Age: Bibliographies and Indexes', *Library Trends*, 7(4), 554-65.
- (ed.), (1999), *Wellesley Index to Victorian Periodicals 1824-1900. The Electronic Edition* (London: Routledge).
- Hughes, Linda K. (2006), 'Victorian Literature and Periodicals: Mid-Victorian Culture Wars and Cultural Negotiations', *Victorian Periodicals Review*, 39, 317-29.
- Leavis, F. R. (1932), *New Bearings in English Poetry: A Study of the Contemporary Situation* (London: Chatto & Windus).
- (1948), *The Great Tradition: George Eliot, Henry James, Joseph Conrad* (London: Chatto & Windus).
- (1972), *Education and the University: A Sketch for An 'English School'* (London: Chatto & Windus).
- Mangum, Teresa (ed.), (2006), 'Special Issue: Periodical Pedagogy', *Victorian Periodicals Review*, 39(4).
- McGann, Jerome (2008), 'The Future is Digital', *Journal of Victorian Culture*, 13 (1), 80-88.
- Pearson, Richard (2008), 'Etexts and Archives', *Journal of Victorian Culture*, 13 (1), 88-93.
- Saintsbury, George (1896), *A History of Nineteenth Century Literature (1780-1895)* (London: Macmillan).
- Scheinfeldt, Tom (13 March 2008), 'Sunset for Ideology, Sunrise for Methodology?' *Found*

History.

<<http://www.foundhistory.org/2008/03/13/sunset-for-ideology-sunrise-for-methodology/>>, accessed 28 October 2010.

Shattock, Joanne and Michael Wolff (ed.), (1982), *Victorian Periodical Press: Samplings and Soundings* (Leicester: Leicester UP).

Spiro, Lisa (11 January 2008), 'Digital Humanities in 2007 [Part 2 of 3]', *Digital Scholarship in the Humanities: Exploring the Digital Humanities*.

<<http://digitalscholarship.wordpress.com/2008/01/11/digital-humanities-in-2007-part-2-of-3/>>, accessed 28 October 2010.

Terras, Melissa M. (2010), 'UCL Centre for Digital Humanities', <<http://www.ucl.ac.uk/dh/>>, accessed 28 October.

Towheed, Shafquat (2010), 'Digital Forum: Reading in the Digital Archive', *Journal of Victorian Culture*, 15 (1), 139-43.

Vann, J. Don and Rosemary T. VanArsdel (ed.), (1978), *Victorian Periodicals: A Guide to Research* (Vol. 1; New York: The Modern Language Association of America).

— (ed.), (1989), *Victorian Periodicals: A Guide to Research* (Vol. 2; New York: The Modern Language Association of America).

Wheeles, Dana (2010), 'Digital Forum: Redesigning NINES', *Journal of Victorian Culture*, 15 (1), 145-49.

国立国会図書館 (2010年8月5日), 「Google によるデジタル人文学への助成」, 『Current Awareness Portal: 図書館に関する情報ポータル』 <<http://current.ndl.go.jp/e1081>>, 2010年10月28日アクセス.